

かって、ようやく楯岡駅に着いたときの嬉しさ、本当に日本に、故郷に帰って来た実感で涙がとめどなく流れたのは今も鮮やかに印象づけられている。

楯岡町役場に行ったところ、偶然にも渡辺助役は出勤していた。思わず助役さんと声を上げた。語ったり聴かれたりしたが、私達は協和開拓団最初の引揚者だった。みんなに囲まれてこれまでのことを話したのだった。楯と齒ブラシを貸して貰い、白い米のご飯を魚で食べさせて貰ったが、一年あまりも食べていなかった古里のあのときの味は忘れられない。

その後助役さんを中心に勤労奉仕隊の家族の皆が集まったので満州開拓現地の情況などを話したのだった。

いまこうして平和な幸せな生活をしているが、四十五年前の苦しかったことはたくさんあったが、団員の皆様から本当にお世話になったことを心からお礼を申し上げます。

敗戦の苦悩から発奮

広島県 大本 啓 二

昭和二十年八月十五日、満州国三江省湯原縣でラジオの受信不能で詳しいことはわからなかったが大体戦況の不利は察していた。九時頃二人の憲兵が四人しかいない湯原駅舎の日本人に対して「重大な命令である」と前向き、後刻通達あるまで貨物列車の移動を許さぬ、と言いき、残り開拓団方面に馬を飛ばして立ち去っていった。

午後四時頃に百十人ほど思い思いの手回り品をまとめて駅前に集まった、開拓団の人達も憲兵の気配で大体敗戦を察していた。私は今まで家族同様だった猫や犬も私や開拓団の家族にすがりついて離れない悲しさが強烈に印象づけられている。

いよいよ、午後六時貨車に乗って出発合図に動いた、今まで協力してくれた満人達は別れを惜しんで、見えなくなるまで手を振って見送ってくれた。開拓団から追い

かけてきた犬達はワンワンほえながら列車を追って走ってくる、線路の両側には開拓部落から駅まで乗って来た馬車の馬も別れを悲しんだのか高くいななきあばれていた。飼い主の開拓団は手放して列車の上で泣いていた。

すべての財産を放棄しての出発だが馬は何ものにも替えられぬ財産だったのだ。野越え、山越え河川を渡り、たしか一週間もたつただろうか緩化駅に下車させられ、ソ連軍の命令で收容所に入らせられて收容所生活が始まる。

日中はクリと呼ぶ労務者の作業で日本人はわずかな高粱、大豆粕等配給を受ける協同生活である。早くも下痢患者続出、たちまち栄養失調を出すありさまだった。

夜になると必ず乱暴なソ連兵が満州人や朝鮮人を案内につれてマンドリンのような銃をもってやってくる。私は時計、カメラ、万年筆一本も全部強奪された。

八月は過ぎ九月末の朝や夕は特に寒気強いのに発疹チフスの猛威にあい同居者の青年に犠牲者が始まったが、りくぞくとして死者を出した。私は幸い早期処理で二十日ほど休息して全快者の一人であった。ついに越冬。な

ぜ日本が敗戦したのか、なぜ若者達が病死し清純な若妻が悲しい目に逢わなければならぬのか。

息を引きとっても弔いもできない、明りも香も供えられない、この地で仏となった人が何千人いたことか。畑に積み重ねて死体の山は固く凍結し、その上に無情の粉雪が舞う、身に付けた死体の衣服は翌朝になればはぎ取られて何一つ残されていない。この悲惨な光景は幾屋箱の後にも筆舌にしては仏に申し訳ないと思いつた。胸が締め付けられる思いである。

翌年、六月二十八日コロ島からさつばつな広い船底にぎっしり三千人余も詰められて横にもなれないが故国日本に帰れる嬉しさ楽しみで不服を言う人もなかった。

三十日朝、十時頃はあるか前方に日本を見付けた。感動のどよめきが起こり手を振り涙を流して感激にむせんだ。午後五時頃舞鶴沖合に着いた。消毒を済まし、大浴場で十一カ月ぶりに垢をおとし、夕方に赤飯をふるまってくれた。布団の上に横になり人間らしい生活にはいった。

思えば敗戦以来、收容され、財産のすべてを失い、身

につけた夏服一つで大病にもならず親子四人無事引揚げて来た。爾来どんな困苦にもひるまず生き抜き日本人としての国民的義務を果たし一家を守り抜いてきた現状を省みるのである。

ふるさとへの道は遠かった

山形県 羽柴 芳太郎

百万戸移民、そして満州建国、五族共和、王道楽土の理想像に惚れ込んで大和民族永遠の繁栄と大日本帝国の隆昌をこいねがい不肖私も開拓地子弟の教育のために昭和十四年三月、拓務省第五次朝陽屯開拓団の学校教師として赴任しました。不便や苦勞は新開地の常と覚悟しての渡満だったので、現地生活は平和と満足感にあふれた毎日でした。しかし日米開戦となるや男子は次々に姿を消し召集され銃後の守りも大分苦しくなってきました。小学校の生徒さえも農作業に毎日狩りだされるありさまで、平和であるべき開拓地も次第に不安の度を増し

てきました。折りも折りソ連軍の越境侵入、不可侵条約の破棄で無血占領そのものだったのです。国境に点在する開拓日本人留守家族の驚きは言語に絶するものがありました。想像も及ばないありさまで、現地を避難するこ
とになり軽装夏服で我が家を飛び出しました。これが日本内地までの避難行になるうとは誰が予想したでありましょうか。昼夜の別なく食うや食わずの強行軍。泥水を飲んで空腹を凌ぎ、目の前にふくれあがった大きな土左衛門を見たときの驚きといったらこの世の出来事かと思
が目を疑いました。生芋をかじり青豆をかんでの毎日でしたので乳飲児は見る見るうちに細り次々に死んでいきました。他人の顔が驚くほど瘦せこけているのを見て驚くばかりでした。逃げゆく方向は誰も教えませんでした
が羊の群れが先頭の一頭について移動する如く黙ってぞろぞろと死の行軍を当てもなく続けました。

終戦の年の八月十八日頃かと思う。路傍に一人の老人が腰を下ろして休んでいた。知人の父親であった。じいさん俺達は先に行っているから後でゆっくり来なさいと声をかけてその場を通りすぎた。翌日行く先々の危険を